

『山海經』の西漸

森瀬 壽三

以前から、なかなか調査の手が付けられないことがある。2年前の平成11年11月9日に関西大学天六キャンパスで行われた『泊園記念講演会』（関西大学主催の東西学術に関する講演会）で、関西大学の和田葉子教授（当時総合情報学部、現在外国語教育研究機構所属）が行われた「中世西欧が見た東洋」と題する講演¹⁾で初めて見聞した、中世の西欧における「東洋」というより「世界の果て」に住む「怪物」たちの話と、その時に資料として配付された中世の木版画や写本に出てくる画像は、極めて興味深かった。以下の雑文は、この方面に門外漢の倉卒な問題提起であるから、もし先学の研究があれば御教示頂きたい。

15. 6世紀のイギリスにおける世界旅行記に関する話は、いろいろと興味深いものがあった。ジョン・マンダビル（John Mandeville）の旅行記は、当時の「国際語」たるフランス語で書かれ、1322年から始まる「旅行記」で、1357年頃にまとめられ、以後二百年ほどは真実の記録として西欧の人士に読み継がれたものだそうだ。無論実地に世界を踏査して書いたものではないが、その書物の

流行は大変なもので、チョーサーの『カンタベリー物語』の種本になったり、かのコロンブスがアメリカ発見の航海に出る際にも持参したという。各国の言語に翻訳され、当時の欧州全体で広く読まれた書であるらしい。この書に限らず、この時代には多くの世界地図や旅行記が書かれている。



我が国でも有名なマルコ・ポーロ（1254~1324年）の『東方見聞録』の影響もあるよう

だが、もっと荒唐無稽な話が並ぶようだ。その話の中には「世界の果て」に住む種々の怪物と異形の人々、奇妙な風習の話が多く出てくる。その中で興味を引いたのは、上図の 1554 年にドイツで印刷された木版画 (Rudolf Wittkower 「Marvels of the East — A Study in the History of Monsters —」 所載) に集約される怪物たちのキャラクターで、それ以前にいろいろな書物に出てくる西欧中世の人々が伝承した「世界の果て」に棲息する怪物のオンパレードである。これと類似する「怪物群像」は中世の写本や地図それに木版印刷物に数多く登場し、以後の文学にも影響を及ぼしている。上の図版を見てみると、左から「大足人」「一眼人」「双頭人」「顔が腹にある人」「獣頭人」である。これらを見るうちに、中国に似たものがあることを思い出した。『山海經 (せんがいきょう)』である。

『山海經』という書物は、古くは後漢の班固『漢書』芸文志の美術略に記載があり、伝説上は禹が作った書であるというが、にわかには信じがたい。この書には『史記』の著者司馬遷も言及して「『山海經』所有怪物、余不敢言也。(『山海經』の有するところの怪物、余はあへて言はざるなり。)」(禹本紀) というから、恐らく戦国期、少なくとも紀元前の著作である。『漢書』芸文志では十三巻の書物であるが、前漢の劉秀が校定、晋の郭璞が注釈を施して、現存するものは十八巻である。かの陶淵明も愛読したらしく「讀山海經」十三首の詩篇を残している。中国人の古代における世界観を窺う上で重要な書物である。近人魯迅も『朝花夕拾』の中でこの書の話に憧れた少年時代を回顧した文を録している。

この古代の地理書に述べられるのは、異形の神人から、半人半獣の怪物、さらに異形の鳥獣魚類まで広く及んでいる。そして晋の郭璞の撰になるという『山海經圖贊』という韻文が伝わっており、かの陶潜(淵明)の「讀山海經」の詩句にも「山海図を流観す」と言うから、それぞれの神怪異形の画像が早くから(或いは書物に先行して)成立していたものらしい。今日見られる図版は、清朝呉任臣によるものである。古くからの伝承をそのまま受け継いでいるとは考えられないが、文章の示すところを示していて、おおよそは古人が『山海經』の図として描いた怪物達のイメージを伝えていると思われる。少なくとも、『山海經』が「西漸」したとすると、そこで伝えられた『山海經』の怪物達の姿とほぼ同じイメージであったと思われる。



まず上に掲げたドイツ木版画に見える怪物を左から右へと順を追って、『山海經』に示される類似のを探してみると以下のようなになる。

最も左に位置するのは、「大足人」であって、このイメージは『山海經』の「柔利国人」に似る。「柔利国在一目東、為人一手一足、反膝曲足居上。（柔利国は一目国の東にあり、人の姿はひとつの手と一つの足で、膝が反り足が上にある。）」（海外北経）。

次に立つ「一眼人」は、『山海經』における「一目国人」で「柔利国人」の直前に記載される。「一目国在其東、一目中其面而居。（一目国はその東にあつて、ひとつの目が顔の真中に位置している。）」（海外北経）。

その右の「双頭人」は、『山海經』では「驕虫」に似る。「有神焉、其状如人而二首、名曰驕虫。（神がいる。その形は人のようで、首がふたつで驕虫という名である。）」（中山経）。

4番目の腹に顔のあるのは、『山海經』の「形天」と酷似する。「形天与帝至此争神、帝断其首、葬之常羊之山、乃以乳為目、以臍為口、操干戚以舞。（形天は天帝とここで神力を争い、天帝はその首を切って、これを常羊の山に葬ったが、その乳を目として、臍を口とし、タテとマサカリをもって舞った。）」（海外西経）。

右端の獣頭人は、『山海經』では「彊良」が似ている。「又有神銜蛇操蛇、其状虎首人身、四蹄長肘、名曰彊良。（また神がいて口に蛇をくわえ手に蛇を持ち、その姿は虎の首に人間の身体で、四つの蹄に長い肘、名付けて彊良という。）」（大荒北経）とある。とくに、多くの西欧中世の画像に見える「大足人」が、上記の『山海經』「柔利国人」の文と見事に一致するのは興味深い。

さらに、この他にも例えば次頁に示すヴァチカン所蔵の「Races of monster(de universo)」に見える怪物には、やはり『山海經』の中に出てくる「長股國」（足長）や「聶耳國」（耳長）の異類に酷似したイメージも描かれている。そして、広く西欧中世の各地に広く現存する画像の中に、多くの『山海經』に記される異類と似た「monster」たちが認められる。この方面の比較的新しい著作の一例として管見に入った英国マックギル大学教授ウィリアムズの著書「Deformed Discourse」（University of Exter Press 1996）所載のいくつかの画像でも確認できる。さらに、『山海經』には西欧の「ベガサス」そのものの「天馬」や、「ユニコーン」と同じ「一角」の野獣も見られる。

このように見てくると、『山海經』という書物およびその図像が、かなり早い時期に欧州に伝わっていたのではないかという推測が成り立つ。それがどの時期であったかは分からないが、可能性としては漢代からありうるものの、恐らくは宋元以降であろうと思われる。中国の学者には、宋代の文化こそが西欧のルネッサンスを誘発したという主張をする人がいる。宋代には中国の海運が盛んとなり、500 噸級の船も造られ、インド洋にまで海上国家の影響



力は及んでいる。しかし、西欧中世の文献に頻見するのは、やはり「ジンギスカン」であって、ヨーロッパを席卷したアジア人は、特にキリスト教圏では一種の「悪魔」であった。この遠征は同時に、西欧の人々の目を「極東」へと注がせる結果となった。元王朝の時代は、海上のルートのみならず、陸上交通も「ジャムチ」と呼ばれる街道・駅伝の設備が、遙かウクライナやトルコにまで通じていて、マルコ・ポーロが元の大都を訪れたとされるのも、この時期である。恐らくこの時期に、『山海經』やその図像も何らかの形で西欧に伝わったのではないかと推測できる。そして、さらに遡って宋代において西へと進出して行った「大航海」の中国船の中に、『山海經』が積まれていた可能性も棄てきれない。ちょうどコロンブスが大西洋を渡り「極東」を目指した航海にマンダビルの「旅行記」を携えていたように。

(平成13年2月稿)

注：

1. 『泊園』第39号(平成12年9月泊園記念会刊)に講演記録を掲載。